

構造家・和田章は ビューツと漕ぐ

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント

■生きる意味

構造家の和田章先生が、マイケル・ジャクソンを熱く語るとは意外でした。東工大の教授の退任が間近な頃、研究室の学生たちにマイケル・ジャクソンのドキュメンタリー映画『THIS IS IT』を観たかと聞くと、誰ひとり観ていない。研究はあとにしてIMAXシアターに行けと、すぐ予約したそう。

マイケルがいかにステージに真剣に向き合っていたか、タイトルの意味を知ってほしいと思ったのです。オーディションに受かった黒人の若者が言ったのがその言葉。「ボクは生きる意味を探していた……。今、マイケルと舞台がやりかったとわかったよ。ボクが生きる意味はこれ“IT”だ!」。

和田先生、「君たちにとってのITは、構造設計ではないのか、これが生きている意味ではないのか!? 寝る間を惜しんで、やろうじゃないか」。そのときは、皆さんからの感想は届かなかったけれど、建築に構造設計に、生きる意味を見出し、実践でも研究でも、卒業生たちが、明日の建築構造界を確かに担って行くはずです。

■エンジニアのモラル

「何事にも、賛成、反対は個人の自由です。だけど、誰かが賛成と言うなら私も賛成、誰かが反対と言うなら私も反対。それでは、専門家としてだらしがないと思いませんか」と、憤る。

新国立競技場計画のアドバイザーをされているのはご承知のとおり。その率直な表現で話題にもなったが、建築界で争いが起きるのは好まない。東工大で

の最終講義を聴いた覇志堂が言う。「建築は幸せを与えるものである」、その言葉が心に残っている。

建築物を、建てては壊す日本の風潮を悲しむ。街に、人に、やっと馴染んできた建物が壊される。壊しているのも建築に従事する者たち。古い建物が共存してこそ、奥行のある街並みが形成されていく。建築エンジニアとしての、モラルを忘れてほしくないとは、同感です。

「日本の国土は世界で61番目と狭いが、海に面している長さは河口を入れると世界一周するほど長い。世界で7番目くらいです」と、構造家らしい説明を出す。「その海岸全部に、大きな津波に負けない防潮堤をつくることは不可能でしょう? ハワイやシンガポールのように、海岸に高層ビルを建て、3階以上の階に住むことにしたら、と提案しています」と、持論を展開してください。お話ぶりは静かでも、言葉はシュツと研ぎ澄まされている。「モタモタしていないで、流されない建物をつくろうよ〜」。

日本人として初めて、Fazlur Khan Medalを受賞されたのが2011年。シカゴの超高層建築の構造家Fazlur Khanにちなんだ、最高峰の賞。「ご存命なら当然取られた先生たちがいらっしゃる……」と謙虚ですが、仕事をしてきた中で、一番嬉しい受賞だったとおっしゃいます。

■ピンチのとき

人生、いろんなことがあるけれど、ピンチの時に参考にしていること。ボート競技ではコックス（舵取り）の指示で漕ぎ手の選手は一心不乱に漕ぐのだけど、橋脚の下には渦が巻いているので、危ない。橋に近づくまでさらに一生懸命漕いで、スピードを出して通過するのが一番の方法。ゆっくり

では渦に巻き込まれてしまいダメなのだ。

人生のピンチが渦だとしたら、通り過ぎるのをただ待つのではなく、「本来の使命を見極めて、漕いで漕いで乗り切ることです。ビューツとね」。和田章先生に座右の銘をいただきました!

